

閑、弓術指南本牧太一らは家屋倒壊の被害を受けた。また、卒業生でないし在校生では星川清雄が入院中の病院が倒壊して死去した外、神谷甚一郎、福与晋作が死去、下村観山をはじめとする多くが家屋倒壊ないし焼失の被害を蒙った。そのため校友会は常務委員白浜徹、鈴木信一、足立芳五郎の発起による見舞金募集を行い、罹災会員を慰問した。

なお、本年の年報の「概況」に東京帝国大学文学部美術史講座のために教室の一部を貸与したことが記されているが、それは数年間に互った模様で、隈元謙次郎は当時を振り返って次のように記している。

私をはじめて矢代〔幸雄〕先生の風貌に接したのは、^{〔天〕}十正十四年の春のことであった。それは東京美術学校の旧図書館の北側にあった校舎の入り口であった。鏝広のスペインの闘牛士か修道僧のかぶりそうな黒い帽子をかぶり、小豆色の革のコートを着け、右腕に同じ色の大きな鞆をかかえた若い芸術家風の先生である。間もなく、それが最近大変な研究業績を挙げて留学から帰国したばかりの矢代教授であることを聞かされた。さすがに、美術学校というところは、日本人ばなれのした先生が居るところだなあと、思い、きわめて強い印象を受けたことを思い出す。

当時、われわれが入学した東大は過る十二年の震災のため大被害を受け、有名な八角堂をはじめ文学部の研究室や教室もくずれ落ちて居た。美術史の講義は滝精一教授も団伊能助教も講義とスライドを併用して進められていたが、そのための教室がなかつたのである。そこで、美校との相談で、もと同校写真科のあった階段教室を借用することとなったのである。その校舎には矢代先生の研究室もあったが、その校舎の一室を研究室として借用し、また講義は前述の階段教室で行われた。そこで、われわれは毎週何回か本郷から弥生町の坂をくだり、逢初の新坂をのぼって上野へ通った。そして、帰国早々の矢代先生の風貌に接したわけである。〔下略。石沢正男、田沢坦らもこの仮教室に通った。〕

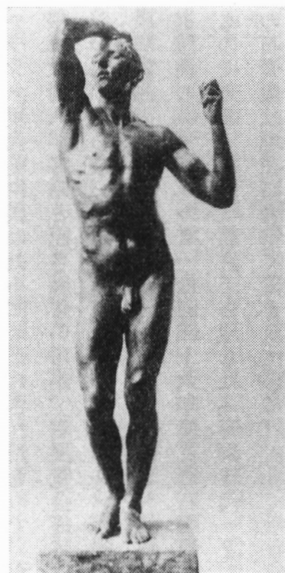
たのである。そこで、美校との相談で、もと同校写真科のあった階段教室を借用することとなったのである。その校舎には矢代先生の研究室もあったが、その校舎の一室を研究室として借用し、また講義は前述の階段教室で行われた。そこで、われわれは毎週何回か本郷から弥生町の坂をくだり、逢初の新坂をのぼって上野へ通った。そして、帰国早々の矢代先生の風貌に接したわけである。〔下略。石沢正男、田沢坦らもこの仮教室に通った。〕

〔矢代先生を偲ぶ——先生と美術研究所』『日伊文化研究』第十四号。昭和五十一年三月、日伊協会〕

浅沼商会寄贈の建物(第二巻684頁)はこの震災で大破した。

⑦ ロダン作「青銅時代」「バルザック」石膏像の寄贈とデルスニス

大正十二年四月、本校では教官、生徒の希望によりオーギュスト・ロダン作「青銅時代」(L'Age d'Airain、本校文書において「黄銅時代」と翻訳されている)の石膏像を保管、展示すること



「青銅時代」石膏像

になった。「青銅時代」は一八八〇年のサロンで三等賞を授与され、フランス政府買上げとなったロダン初期の代表的傑作で、原型は国立ロダン美術館蔵。

この石膏像は大正十一年五月、デルスニスが第一回フランス現代美術展に出陳した作で、本校がこれを保管することになったのは、同展覧会のために正木直彦校長、黒田清輝教授その他本校職員が種々便宜を図ったことへの謝礼としてデルスニスが一年間これを貸与する約束をしたためであった。早速本校はこれを文庫一階に展示したが、同年九月一日、大地震により不幸にも倒壊してしまった。

朝倉文夫教授はこれを聞くや、余震も止まぬうちに弟子を二、三人連れて駆けつけ、三日間修理に当たり、殆んど修繕不可能と見られていたものを完全に修理し、記念のために修理箇所だけを残して着色しておいたという。これは教え子たちが朝倉からよく聞かされた自慢話の一つであるが、フランス留学をしなかった朝倉は、ロダン研究の好機とばかり全力をあげて修理に臨んだ模様で、自著『私の履歴書』（昭和三十三年十二月『日本経済新聞』連載）にはこの修理によってロダンのテクニクを十分研究できた旨を記している。

石膏像倒壊後、同十四年九月にはデルスニスの斡旋によりフランス政府からブロンズ製の「青銅時代」が本校に寄贈された。本学芸術資料館中庭の像がそれである。同年七月二十九日『時事新報』はこの像が「原型から直^{〔欠字〕}鑄物にした最も原型に近いタッチを持つもの」であると報じている。

本校はやはりデルスニスの斡旋によりロダンの「バルザック」（一八九七年）の石膏複製像も寄贈されている。これは昭和二年の

第六回フランス現代美術展のためにもたらされたもので、本校の収蔵品台帳には同八年寄贈と記されているが、右展覧会終了以降本校寄託となっていたらしい。同六年の十周年記念フランス美術展覧会には本校収蔵品として「青銅時代」とともに出陳されている。本学附属図書館前の「バルザック」は同四十六年にこの石膏像から鑄造されたものである。なお、朝倉が修理した「青銅時代」と「バルザック」の石膏像は現在石膏室に置かれている。

デルスニスは、大正十年代から昭和初期にかけてフランス現代美術をわが国に精力的に紹介した。彼がもたらした作品の中には警視庁の検閲により陳列撤回となったものもあったが、その展覧会は大いに美術家の関心を引き、観衆を集めた。その上、デルスニスは上記のような名作の寄贈にも尽力し、日仏美術交流に大きな足跡を残した。彼の業績を知るための資料にはフランス現代美術展のカタログ類や『日仏芸術』（東京国立文化財研究所、本学附属図書館その他に収蔵されている）、黒田鵬心著『巴里の思出』（鵬心選集第九巻、昭和三十一年、趣味普及会）などがあるが、それらとは別の資料が本学所蔵の記録文書中にあるので、ここに紹介して今後の研究に資する。これはデルスニスの功績に鑑みて東京美術学校が文部大臣に叙勲の内申（実現しなかった）を行なった際に作成したものである。

案

外国人叙勲内申

我國近代美術ノ発達ハ佛蘭西美術ニ負フ所甚ダ多シ 惟フニ明治ノ初期以降美術ニ関スル留学生ハ専ラ佛蘭西ニ派遣セラレ其系統

ヲ傳ヘタル者現代美術界ノ首脳部ニ在リテ斯道ヲ開發シツ、アルニ依ルナル可シ 然レドモ美術ノ事タルヤ單ニ彼地ニ學ビタルノミヲ以テ満足ナル効果ヲ収ムルコト能ハズ 必ズヤ其美術品ノ實際ヲ觀ルニ非ラザレバ眞ヲ傳フルコト困難ナリ、サレバ佛蘭西ニ學ブモノ數多シト雖モ其作品ヲ將來スルコトノ稀有ナルハ美術教育上遺憾トセシ所ナリ

此時ニ方リ佛蘭西共和國人エルマン、デルスニス氏ハ大正十一年初メテ我國ニ佛蘭西現代美術ヲ多數將來シテ其第一回ノ展覽會ヲ開催シ上下ニ多大ノ感動ヲ與ヘ殊ニ美術教育上ニ裨益スル所尠カラザリキ 爾來昭和二年ニ至ル六年間毎年其展覽會ヲ東京ニ開催



第3回展覧関係者 大正13年6月 於日本美術協会
前列中央黒田清輝、左デルスニス、右黒田鵬心
後列左より4人目水谷鉄也、6人目目田孝次
(『巴里の思出』より転載)

シ時ニ大阪ニ或ハ地方ノ勸ニ依リ仙臺、札幌、金澤、福岡等ノ各地ニ開催シタルガ其毎年多大ノ努力ヲ以テ繼續開催シ来リタルコトハ座ナガラニシテ佛蘭西現代美術ノ推移ヲ我國ニ於テ知ルコトヲ得ルヲ以テ我國美術發展ノ上ニ與ヘタル裨益實ニ計リ知ラレザルモノアリ

又デルスニス氏ハ日本美術教育ニ益スル目的ヲ以テ嚮ニ東京美術学校ニ佛蘭西ノ巨匠「オーギュスト、ロダン」ノ製作ナル黄銅時代ノ鑄造像ヲ寄贈シ次ニ同ジク「ロダン」作中ノ代表作タル文豪「バルザック」ノ石膏實大像ヲ寄附シ更ニ東京府美術館ノ新タニ建設サル、ヤ佛蘭西現存ノ大家「ジョセフ、ベルナル」作ノ「ダンス」ノ浮彫大額ヲ寄贈シタリ

斯ノ如キハ同人ガ我國美術ノ發達、美術教育ノ開發ニ資スルノミナラズ又美術ヲ以テ日佛親交ヲ計ラントスルニ在ルナル可シ 此ノ不断ノ佛蘭西美術ノ紹介ノ努力ハ遂ニ佛蘭西政府ノ認ムル所トナリ本年ハ從來ノ個人事業ト異ナリ佛蘭西共和國政府ニ於テ多大ノ援助ヲ成シ「ルクサンブル」國立美術館秘藏ノ名画二十三點ヲ政府出品トシテ陳列シ佛蘭西裝飾美術家協會ヲシテ三十五室ノ「モデル、ルーム」ヲ出品セシメ或ハ佛蘭西文化交流協會又ハ佛蘭西海外展覽會常設委員會ヲシテ其出品作品ノ撰擇ニ當ラシメタル結果從來ニ見ザル大規模ノ有意義ナル大展覽會ヲ開催スルヲ得現ニ東京府美術館ニ於テ美術家、工藝家、建築家ニ絶好ノ参考資料ヲ供シツ、アルガ「デルスニス」氏ハ佛蘭西共和國政府ノ依嘱ヲ受ケテ展覽會ノ派遣員トシテ此事ヲ執掌シツ、アリ
思フニ「デルスニス」氏ハ此ノ佛蘭西美術ヲ將來シテ我國ノ文化

ニ貢献スル事業ノ為メ鈔カラザル財力ト勤勞トヲ費シタルヲ以テ我國ノ美術教育上ニ多大ノ貢献アルコトヲ認ム 依テ斯ノ如キ貢獻ニ對シテ國家ガ之ニ酬ユル為ニ相當ノ叙勲ノ恩命アルヲ至當ト思惟スルヲ以テ右執奏方御執計相成度同人履歷書并ニ本年展覽會ノ彼我役員及出品物目錄等相添ヘ此段内申候也

昭和三年四月五日

東京美術学校長

文部大臣宛

エルマン・デルスニス畧傳

エルマン・デルスニスは一八八二年佛蘭西人として瑞西ジュネーヴ市に生る。父は医師を業とす。デルスニスは繪画、彫刻に興味を有しニース市の美術専門学校に入學せしが、後此の志望を變じ農業大学に入り一九〇七年工學士として同校を卒業せり。

卒業後直ちに實地研究の爲め、露西亞、支那、シヤム方面に旅行せり。一九一四年東洋滞在を打切り歐洲大戰に佛軍の一兵士として出征し、ヴェルダンの戦には下士として従軍し獨軍の捕虜となり約一年半獨逸に滞留し後瑞西に移り一九一九年佛蘭西に還れり。

一九二〇年支那の興業銀行に入り、再び東洋に來り其際始めて日本に旅し三週間滞在せり。銀行閉鎖後日本の穩雅典麗なる人情と自然とに感激し、又一方佛蘭西文化の日本に於ける影響の多大なるを見、最も正しく佛蘭西文化を日本に紹介し且つ日佛親善の爲め佛蘭西美術展覽會の開催を企て一九二二年始めて佛蘭西現代美術展覽會を東京及大阪に開催し爾來毎年之れを開催せり。

今回は佛蘭西裝飾美術家協會並に佛蘭西海外展覽會常任委員の命を受け一九二八年度の佛蘭西美術展覽會を東京に於て開催する事となれり

目下上野公園の美術館に於て開會中の右展覽會は佛蘭西文化交流協會（文部美術省所屬）佛蘭西外務省同文部省同商務省の共同主催の下に組織されたるものなり

更に今回は特別陳列としてフランス外務省及文部美術省の希望により佛蘭西美術を正しく日本へ紹介せんが爲め國立リユクサンブル美術館所藏の繪画二十三点を特に貸出されたり 右はデルスニスが日本に於て開催せる美術展覽會に對して佛蘭西政府が公式に援助を始めたる証左にして右展覽會の目的を益々有効ならしむる爲めなり

佛蘭西美術展覽會狀況摘要錄

第一回佛蘭西現代美術展覽會

會場 農商務省商品陳列館

期日 自大正十一年五月一日至同廿一日

入場者數 五萬二千名（概數ヲ舉グ 以下同）

第二回佛蘭西現代美術展覽會

會場 上野公園竹之台陳列館

期日 自大正十二年四月三日至同廿九日

入場者總數 五萬一千名

第三回佛蘭西現代美術展覽會

會場 上野公園美術協會列品館

期日 大正十三年自六月一日至同三十日

入場者数 五萬四千名

第四回佛蘭西現代美術展覽會

會場 上野公園日本美術協會

期日 大正十四年自九月二日至同二十三日

入場者数 四萬五千名

第五回佛蘭西現代美術展覽會

會場 上野公園日本美術協會

期日 自大正十五年五月十五日至六月廿五日

入場者数 四萬四千名

第六回佛蘭西現代美術展覽會

會場 上野公園東京府美術館

期日 昭和二年自三月一日至四月五日

入場者数 四萬一千名

第七回佛蘭西美術展覽會

會場 上野公園東京府美術館

期日 昭和三年自三月廿三日至五月八日

入場者数 三萬七千名

右の「外国人叙勲内申」末尾に記されている「本年展覽會ノ彼我役員及出品物目録」は現存しない。「佛蘭西美術展覽會狀況摘要録」と「デルスニス氏寄附品名及價格並解説」（本書には省略）は日仏芸術社（130頁に既出）用紙に記されている。

本校にとってデルスニスは極めて親しい存在であった。島村三七

雄は昭和四年三月に西洋画科を卒業してパリに留学するが、彼の「シベリヤ經由バリ遊学案内記」（『東京美術学校校友会月報』第二十八卷第六号）にはデルスニスに同行してパリに到着するまでの模様とバリ遊学の諸要件が詳しく記されている。本校卒業生のなかには島村の外にもバリでデルスニスの世話になった人が多く居たに違いない。また、『日仏芸術』第二卷第十二号（大正十五年六月）には在外研究出張中の本校教授田辺孝次とデルスニスの近信が「バリより」と題して掲載されており、そのなかで田辺は、デルスニスが日本人の女中に子供の世話をさせていることや、ルクサンブル公園の裏町のデルスニスの事務所の新装が成り、そこでは義弟のセラが主任格で働いていること、田辺はそこを時々訪問し、あるいはデルスニスの家族と交際していることなどを伝えている。さらに、大正十二年五月十二日から同十七日までの『読売新聞』には本校彫刻科卒業生の団体である東台彫塑会の展覽会に対するデルスニスの批評が連載されている。このように本校との交流を示す資料は枚挙に遑がないが、デルスニスが破産して日本での展覽会が杜絶したことにより交流も跡絶えた。昭和八年二月二十五日の『時事新報』（他紙にもほぼ同様の記事が掲載されている）にはデルスニスの肖像写真とともに次の記事が載っている。

日佛交驩の功勞者を救ふ

落魄のデ氏へ送金

○……美術の都パリから歐洲大戰後日本に來朝したパリの美術商デルスニス氏は當時日本に十年間も滞在しその間日本の作品を集

めてパリで日本美術大展覧會を開いたりまた日本でフランス美術の展覧會を開く等盛んに日佛美術交驛に盡力し日本美術界に功勞多かつたが、其の後パリへ歸り消息を絶つてしまつたので日本の關係知己等はそれとなく氏の安否をさぐつて居た所最近に至りデルスニス氏がパリのノートルダム・デ・ジャン通りに見るも哀れな落魄の生活を送つてゐることが判つた

○……そこでこの話を聞いた友人の正木〔直彦〕美術院長や和田英作畫伯等が率先各方面を説いてまはり醸金し得た金が五千三百三十五圓となつたので駐佛長岡大使の手を通じ本人に傳達方を二十四日外務省に依頼して來たので外務省では直にその手續をとつた

義捐金贈呈のことは正木直彦の『十三松堂日記』第三卷（昭和四十一年、中央公論美術出版）の昭和八年の部分にも

二月十四日〔中略〕曾て余と和田英作氏連名にて發起しデルスニス氏の現在の悲況を悲て過去の氏の佛文化宣傳の功績を追憶して贈物を爲さんと同氏の舊知に回章を以て言込みたるに今日其作品日本畫洋畫工藝品等三十幾點之を評價したるに四千五百圓となりたり 鹽原又策氏全部之を買取り更に五百圓を寄付せられたり〔下略〕

二月十五日〔中略〕デルスニスに贈るへき金五千圓を田邊孝次に渡す〔下略〕

とある。また、日記によれば、昭和十年秋から冬にかけて、正木は

「佛國古名畫展覧會開催の要務を帯ひて」來日したデルスニスと幾度か会つたことが判る。前出『巴里の思出』によれば、デルスニスは昭和二十年代に死去したらしい。

⑧ 彫刻科塑造部教室制度止

塑造部は大正十年に教室制を採用したが、同十二年十一月に至り、再び学年制採用を決定した。これについて「授業関係書類」〔大正十二年一月〕昭和二年十二月、教務掛作成に次の記録がある。

伺 大正十二年十一月一日立案〔鈴木〕

校長〔正木〕塑造部教官〔建島〕書印〔朝倉、西望〕

彫刻科塑造部ノ教室別ヲ止メ本學年ヨリ學年別トシテ授業スルト、定メラレ可然哉其受持配當左表ノ如シ（裏面ニ記ス）

年級	大正十二年	大正十三年	大正十四年
学期	学期	学期	学期
一	二	三	一
二	一	二	二
三	一	三	三
四	一	二	一
四	二	三	二
四	三	一	三

甲、建島教授 乙、朝倉教授 丙、北村教授

注意 第一、第五学年ハ合同受持トス

本學年塑造部教室配當次ノ通り

大正十二年十一月塑造部教室配當